

二〇二〇年二月一八日

煮凝の奥に虚ろな目玉見ゆ
禅寺の大樹の枝に掛け大根
味噌桶の底に屋号や冬日向
よきことの魁ならむ福寿草
三日ぶり先ず除雪して買物に

二〇二〇年二月一七日

古の栄華の間歩や山眠る
味噌桶にたまりの滲む寒灯下
市章旗千切らんと吹く空っ風
茶の花の蕊美しき金こぼす

二〇二〇年二月一六日

後ろ手に門松立つを見守りぬ
ビル街の日差しの中を風花す
演習林鉄扉を鎖して山眠る
年用意外なることは夫の役
荒海の迫りし宿や松葉蟹

二〇二〇年二月一五日

玻璃越しに猫と見て居る深雪かな
山の湯の桶に揺れゐる枯木星
交番の赤灯冴ゆる真夜の町
ひと葉また地に還らんと朴落葉
寒風の磨きあげたる蓮如像
堰落つる水音に募る寒さか

素 秀

智恵子

なつき

潤 道

こすもす

凡 士

なつき

たか子

智恵子

なつき

せいじ

凡 士

たか子

もところ

こすもす

素 秀

凡 士

む べ

素 秀

宏 虎

二〇二〇年二月一四日

ボーゲンに突き出すお尻初スキー
亡き母の口調で湯ざめさとしけり
細竹のしなりて重し煤箒

二〇二〇年二月一三日

花舗の前真つ赤つかなるクリスマス
術後の目文字くつきりと冬ぬくし
大津絵の鬼が睨める歳の市
マスクずれ歯抜けばれたる不覚かな
御仏のお顔に冬日届きけり

二〇二〇年二月一二日

やわらかな日差し窓辺に賀状書く

智恵子

もところ

なつき

たか子

やよい

凡 士

なつき

あられ

菜 々

毎日句会みのる選・二〇二〇年二月二〇日